

『模地数里』に描かれた松前

—長春丸・女商人・馬—

菊池 勇夫

KIKUCHI Isao

(COE共同研究員)

はじめに

江戸から松前への往復の旅のさいに描かれた『模地数里』というスケッチ風の風物図集（彩色）がある。国立公文書館内閣文庫の所蔵で、上下二冊本である。『補訂版国書総目録』（岩波書店）によると、他に岩瀬文庫に写本があることが知られる。それぞれの図に説明文がついているので絵紀行とでもいったほうがよいかもしい。

奥州街道で見た風物が多く描かれている。とくに松前関係の図は、19世紀前期の松前城下（福山）の様子を視覚的に伝える好資料として、しばしば挿絵（図版）として利用されてきた。松前関係の図はすべて『模地数里』下に描かれ、下の前半部分に、三馬屋（御厩）、御用船長春丸、松前福山（船中より見たる図）、黒百合（ソウヤノ産）、母衣草（ほろくさ）、松前町々大略絵図、小松前の大見世商人、小売商人見世、肴商人、女商人・女手伝人足、夜番人・番木、ばくち石、弁財天、五節句に三絃を引く門付けの盲人、五月五日の乗馬、甘どころ（イケマ）、舍利蟹、がのじ（女郎）屋に遊ぶ船頭^{かざ}の客、馬形社地^{まがど}での角力興行、石狩川の図、奉行所に出る蝦夷人（アイヌ）のはれのかたち、馬で薪・炭を運ぶ馬子、女の日用、熊谷草、エソ地鳥のタマゴ、はままめ、浜なし、の各図が描かれている。また下の最後に、松前昆布を取る図、北蝦夷（カラフト）の三弦とそれを弾くエゾ人（アイヌ）、ヲロシヤのカミソリ、の各図が付け足されている。

小論では、これらの図のうち、長春丸、女商人、および馬を描いた図をおもに取り上げ、絵解きを通じて、近世後期の松前の様相の一端を明らかにしてみたいと思う。『模地数里』の旅は後述するように1818年（文政1）のことである。当時、松前藩は陸奥梁川に転封されており、松前・蝦夷地は全領幕府の直轄支配下におかれ、福山館（城）を政庁とする松前奉行が管轄していた。このような政治環境も念頭におかねばならない。

I 『模地数里』・『陸奥日記』について

『模地数里』は、かつて高倉新一郎によって「松前の物売り 夜番の図」の箇所が取り上げられたことがある。高倉によれば、嘉竜という人が著した『陸奥日記』の附図で、この日記に序文を書いた魚澄子璞から画帖を贈られたのが絵を描くきっかけになったという（高倉 1987：37-43）。しかし、『模地数里』の成立事情や『陸奥日記』との関連などについてはまだ詳しく調べられていないのが実

状である。書誌的検討は中途にすぎないが、図の絵解きに入る前に、確認できたことだけでもまずは述べておこうと思う。

『模地数里』上のはじめに「おくの国に旅たつ頃むまのはなむけにとて、草紙をとちて道すからめつらしと思ふ處をうつしてよと、葆光ぬしの玉いりけれハ、其まゝみちかき筆もて、なかき旅のところ〜何にまれ書うつして家つとになすのミ」と書き記しているように、葆光なる知人の求めによって道中の珍しい風物を絵に描き、旅の土産にしようとしたものであることがわかる。また、下の冒頭には「みちのくのミちすからに見しままをにしりかき（躰り書き）し戻すり（振摺）とうは書きして二冊のさうしとはなりぬ」と、書名を「もじずり」と題して二冊本になったことを明らかにしている。

このように序文のようなものがあったとしても、筆者名も日付も記されていない『模地数里』であるが、図の説明文のなかに「今年松前御奉行文寅勤役本多君」、「四月十三日といふ日古川といふ駅をたち」「文化十五年戊寅三月十九日廿日上り候えほしくじら」「文化十五年寅四月廿一日之事、寅としをいむ者江戸にもあれハ…」(以上、上)、「今文化十五年寅とし夏の咄し也」「黄金鶏雌雄、文化十五年戊寅三月上旬土中より掘出す」(以上、下)などと書かれており、1818年(文化15=文政1)の夏の時期を含む旅のさいに執筆されたものと判断される。ちなみに松前奉行本多君は本多淡路守繁文で1815年(文化12)11月から1820年(文政3)2月まで松前奉行を勤め(『柳営補任』巻之二十)、1818年(文政1)4月27日に任地の松前に上陸している(松前町史編集室『松前町史年表』)、齟齬はない。

ところで、たまたま東北大学附属図書館所蔵の狩野文庫に含まれる『陸奥日記』乾・坤(外題)という二冊本を目にする機会があった。乾の内題(序の前)には「陸奥日記」とあり、内閣文庫本『模地数里』下の部分に相当する写本で、「もじずり」と題名をつけたという『模地数里』と同文のまえがきもある。ただし乾の図自体は『模地数里』に比べ精確さに欠け、『模地数里』下の最後にあった昆布刈り以下の図が省略されており、あまり参考にならない。一方、坤の内題には「みちのく日記夏」とあり、「三十日」(4月)から始まる本文書き出しの前には「陸奥日記巻の式」と記されている。文末には「文政元年六月六日」の日付が書かれ、江戸に帰着してこの旅が終わったことを示しているので、これに続く巻の三はないだろう。したがって、この狩野文庫本は『模地数里』下と『陸奥日記』巻の式がセットになったもので、それぞれ上、巻の壺に相当する前半部分が欠けていることになる。

狩野文庫本『陸奥日記』の乾・坤は内容的に対応しており、同一人が同じ旅のさいに作成したものと考えられる。文中心の『陸奥日記』巻の壺・式と絵(スケッチ)中心の『模地数里』上・下の二種類が作成され、両者を合わせて旅の記録としたのであろうことが推測される。狩野文庫本によって『模地数里』と『陸奥日記』とが密接な関係にあることが判明したので、『補訂版国書総目録』で『陸奥日記』にあたってみると、狩野文庫と同種とされるものが岩手大学図書館にあり、またそれとは別に『陸奥日記』または『みちのく日記』という同名の紀行・歌文類が七種類ほど掲げられている。この別種とされるものの中にも狩野文庫本と同じものの写本が含まれているのではないかと疑われ、狩野文庫本と成立年が同じ、1818年(文政1)成立の央齋なる人物が著した『陸奥日記』を調べてみることにした。

央齋のものは国立国会図書館、宮城県立図書館、市立函館図書館に所蔵されている。このうち宮城県立図書館所蔵の一冊本を閲覧してみると、外題には「みちのおく日記」とあり、内題には「陸奥日記 春」、また本文の前には「陸奥日記巻の壺」と記されていた。巻の式はなく、『模地数里』に相当

する図も付いていない。狩野文庫本の『陸奥日記』（坤，卷之弐，夏）と比べたとき、筆跡が非常に似ているという印象を持った。宮城県立図書館本の卷の壺（春）と狩野文庫本の卷の弐（夏）とは日記の日次が前者が3月27日から4月29日まで、後者が4月30日から6月6日までと無理なくつながっており、しかも宮城県立図書館本の卷の壺の記述が内閣文庫本『模地数里』上の図と合致していることが確認できた。したがって、両者（卷の壺・春，卷の弐・夏）が合わさって『陸奥日記』が完結することになり、しかも、筆跡が似ているので、同じ人の手になる写本が離れ離れになってしまったものようである。卷の壺に魚澄子璞の序があり、そこに著者が嶽丈央齋であることが記されている。

国立国会図書館本の『陸奥日記（みちのくにっき）』は一冊本であるが、3月27日から6月6日までが記された完本である。狩野文庫本・宮城県立図書館本のように卷の壺・弐の区別がない。魚澄子璞撰とある序には印が二つ捺してあり、その一つは「葆光」と読める。書体も能筆で、自筆本とみてよいのではないかと思われる。『模地数里』に相当する図はないが、内閣文庫本『模地数里』の図の説明文の筆跡とこの国会図書館本『陸奥日記』の筆跡とはかなり似ており、この二つがセット本であったかはともかく、同一人すなわち央齋の自筆本の可能性が高いと判断しておきたい。『陸奥日記』には一冊本と二冊本とがあることになるが、本来一冊本であったものを、『模地数里』上下二冊本と対応するように分冊したのであろうか。

『陸奥日記』は「みちのく日記」あるいは「みちのおく日記」と読まれてきたのだと思われるが、北海道大学附属図書館編『日本北辺関係旧記目録』（北海道大学図書刊行会）に『陸奥日記』（むつにっき）と題する書名があった。これも嶽丈央齋の『陸奥日記』の写本で、伊藤圭介所蔵本を宍戸昌が写したものであることが知られた。魚澄子璞の序があり、国会図書館本と同じ一冊本である。本文のあとに『模地数里』の図のうち4図（内一つが松前図）のみが写され、他は省略した旨記されている。伊藤圭介所蔵本は『模地数里』上下も『陸奥日記』とセットで備わっていたと推測される。この北大本には図書館関係者による調査メモが付いており、魚澄は「日尾荆山」とであると書き残している。

他に市立函館図書館本などの調査によって新たな知見が得られるかもしれないが、『模地数里』（内閣文庫本）の図を読み解いていくためには不都合がないので、書誌的な追求はひとまずここでとどめておくとしよう。『陸奥日記』の引用にあたっては、以下自筆本かと思われる国会図書館本に拠ることとする。

ところで、『陸奥日記』および『模地数里』の著者が央齋とわかるのは、すでに述べたように、「文政改元六月中瀬」の日付のある魚澄子璞撰の序（漢文体）のなかに「嶽丈央齋翁」とあることによる。まず魚澄子璞についてであるが、自ら「葆光」の印を用いており、また『模地数里』上のまえがきに葆光の名が記されていることが手掛かりとなる。『国書人名辞典』（岩波書店）によると、日尾荆山（漢学者・歌人）が魚住（魚澄）氏を名乗り字が葆光であることがわかり、同一人物であるのは間違いない。北大本の『陸奥日記』の調査メモはすでにそれを探り当てていたことになる。

詳しくは触れないが、荆山は亀田鵬齋・清水浜臣の門人で和漢の学に通じ書もよくしたといい、多くの著作を残している。序文には央齋は幽境を探ることを嗜み、観たものをよく図に描いたというようなことが書いてある。荆山は1789年（寛政1）生まれであるから1818年（文政1）といえは30歳にあたるが、少壮の学者が翁というにふさわしい年配の央齋のそうした性質をよく知っていて、絵をスケッチするための綴じ合せた帳面をはなむけに贈ったという関係になる。

央齋については江戸の住人という以上にどんな人物なのか分からないが、荊山あるいはその師亀田鵬齋の周辺にいる文人・歌人グループの一人なのであろう。『陸奥日記』の終わりに掲載された和歌に、「嘉龍，直丸，義通」の3人の名があり，末尾に「素全蔵」と記されている。何らかの手掛かりが得られるかもしれない。冒頭に紹介したように，高倉が著者を嘉竜としたのはこれに拠っている。直丸は荊山が「直磨」と号していたので，おそらく荊山のことであろう。『陸奥日記』によると，央齋は1818年（文政1）3月27日に，誰か不明だが陸奥に下る人に誘われて卯の刻（朝六時頃）江戸を出発した。千住駅まで見送り人が同道したが，同駅で現地に赴任する松前奉行の手付として随伴する井上氏と逢っている。井上は親子で役を勤めるといい，松前に着いてからの日記によると，5月7日箱館へ勤番に赴くという井上と暇乞いしている。この井上氏は央齋が昔より知る人であり，その後の奥州道中，二人は所々でよく逢っていたことが知られる。

また，4月20日古川で，江戸の中山氏角兵衛が従者松五郎を連れ駕籠に乗って来たのと一緒になっている。小松前に上陸したあと，央齋は中山氏とともに馬形（まがど）の交代屋敷に行っているので，中山も松前奉行付の役人であったのだろう。央齋は3月27日，千住駅で松前御奉行様の下向行列を拝見と記しているから，赴任の旅の一行に加わっていたわけではないが，井上や中山との交際をみると，彼らの旅に寄り添うように行動しており，松前への旅を敢行する契機にあるいはなっていたかもしれない。

央齋は松前への渡海口場である三厩に4月24日に着き，吉田屋に泊まっている。ここで風待ちをし，27日に松前（福山）に渡った。松前奉行本多淡路守が乗った後述の御用船長春丸が同じ日に海峡を渡っている。央齋はどの船に乗ったのか記していないが，上陸後中山氏と一緒に行動していたことを考えると，中山の乗った船に同船していたのであろう。松前での逗留先は馬形の町角の酒屋坂本屋九兵衛方であった。九兵衛の子息は坂本良亮という総髪（そうかみ）の医師で，先年江戸に登って林大学頭のところへ3，4年居たといい，赴任してきた松前奉行本多の役所に帯刀で勤めることになっていた。央齋は5月10日に三厩に渡海しているので二週間ほどの滞在であった。この間，良亮に案内されて松前城下を歩いたり，あるじ九兵衛からさまざま聞くなど，松前・蝦夷地についての知識を得た。松前滞在中のことは，必要に応じて次節以下で述べることにしよう。帰りも奥州街道をのぼり，6月6日に江戸に戻っている。

II 御用船長春丸—赤塗りの船（赤船）・日の丸の帆—

図1の船は，松前奉行本多淡路守が1818年（文政1）4月27日，三厩から松前に渡海するさいに乗船した幕府の「御用船」長春丸である。この日は「やませ」（東風）が吹いたので朝早く出帆した。津軽海峡には竜飛，中の潮，白神といって潮流の難所があり，央齋によると船酔いしないように「皆〜まじない」などして乗り込んだという（『陸奥日記』）。何事もなく渡海したようだ。松前に上陸した奉行はまず沖の口船役所に入り，それから御城（福山館）に入った。図の説明文には次のように記されている。

御用船は大サ五百石積位の船，赤塗にて長春丸と申，常はいぎつふの御船蔵に入よし。供船は四百石つミ二艘，馬船とも四艘にて渡海しけり。又ズアイとて五十石程つミ可申やぐらなき船あり，

其次をサンパといひ、又磯舟の如き小さき舟をポツチといふ。是らハミなゑぞの言葉を松前にてもいふ。長春丸は船出に小舟に十挺の櫓を押立て左右五艘つゝ網にて十町斗が程ベイロウエンヤラ〜ト曳也。着岸も同様也。松前ちかき海中にて江豚ルカ多く頭尾を出しはねるをミル。

順風渡海 長春丸 龍飛白上 中之汐

これによると長春丸は500石積みで赤く塗られていたといい、彩色された図をみると船体・矢倉が確かに赤く描かれている。供船2艘や馬船4艘とともに船隊をなして海峡を渡ったことになる。『陸奥日記』にも、この三度の「海に御迎の船かゝりて有、赤ぬり長者丸と申、(ここに吹流しの図あり)、日の丸の幟、毛やり(鏝)四本、紺アサキ布ませまく(幕)也。同じ赤船壹艘、是ハ観音丸といふよし。外に四百石つミと申船三艘かゝりてあり」(4月24日)と書かれている。細かにみれば、船数が図の説明文とは違い、鏝の数も図とは違っている。それはともかく、長春丸の供船になるのだろうか、もう一艘観音丸という赤船が付き従っていたことがわかる。

まず、赤塗りの船、あるいは赤船と呼ばれていることに関心を向けてみよう。赤船についての考察がどれほどあるのかよく承知していないが、幕府が1799年(寛政11)に東蝦夷地を直轄したさい、官営の蝦夷地御用船を「赤船」と俗称したことが知られている(『国史大辞典』吉川弘文館、石井謙治執筆)。石井は別の著書では、高田屋嘉兵衛がエトロフ渡海用の新造差配した5艘の船について、弁財船を軍船風の総矢倉形式に建造したという特徴とともに、帆柱を赤く塗って一見して蝦夷地御用船とわかるようにしたと述べ、赤船と俗に呼ばれたのは、帆柱を赤く塗ったことによるとしている。ただし、蝦夷地御用船の図面(竜翔丸)には、帆柱が白木のままで、総矢倉を赤く塗っているのがみられ、赤塗りについては時期的な変化が考えられ、「今のところ断定的な言い方はしないほうがよさそう」と慎重な態度を示している(石井 1995a : 66)

文化期頃の蝦夷地関係の記録を見ていると、赤船という言葉が散見される。たとえば箱館奉行羽太正養の『休明光記』には、1806年(文化3)から翌年にかけてロシア人によるカラフト・エトロフ来寇事件が起きたさい、リイシリ島に乗り捨てた「帆柱のなき赤船」(御用船万春丸)があったが、それにロシア人が乗り込んできて焼き払った云々と、赤船(赤舟)という表現が文章中に何度かみられる(北海道庁編纂 1936 : 503-504)。来寇事件の状況説明は省くが、『通航一覽』第七の所収史料に「御用船赤船一艘」「公儀御用船靈祥丸といふ赤船」(早川編輯 1913 : 236, 267)、また、平田篤胤編『千島の白波』所収の史料に「公儀御用船、赤船と申ふらし置候処、右赤船」「蝦夷地廻船赤船壹艘…此赤船之船頭如神丸差吉、赤船一番の乗人」「兼而公儀二而新二御造立之舟七八百積十五六人乗、赤船と唱候船御座候」(秋月翻刻・解説 1994 : 113, 150, 267)などと、赤船が出てくる。蝦夷地を航行する船のどの部位が赤く塗られていたのか、そのことを明示的に記した文献には残念ながらまだ出合っていない。

紹介にとどめておくが、淡斎如水(蛭子吉蔵)『松前方言考』(1848年・嘉永1序、国立国会図書館



図1 御用船長春丸 『模地数里』下所収。独立行政法人国立公文書館内閣文庫所蔵。以下、図3~5, 7, 8, 10は出典同じ。

所蔵写本)のなかに、「ツキヤク△アカフ子」という項がある。それは「婦人の月信の事をいふ」言葉なのであるが、「あかふね」というのはやや40年このかたの「流言」(流行語)のように思われ、蝦夷地が幕府の直支配であったころ、「産物運送の御用船をハ丹にて塗りて赤かくし船なりしに、よりてみだりに乗る事のならぬといふよりしての流言にてやあらん」、あるいは「又おそろしといふ意にもかよハせ」ているのかと推量していた。

前期幕領期の蝦夷地御用船のことは前出『休明光記』にみえ、1799年(寛政11)から1804年(文化1)までの間に幕府が所有した、1200石積の政徳丸をはじめ30艘の船の名が知られる(北海道庁編纂1936:336-337)。そのほとんどは新造された船で、蝦夷地産物を江戸・大坂などに運送するのに使われたが、破船となる船が多かった。1812年(文化9)に東蝦夷地の直捌制が廃止され場所請負制になったことを受けて、残船は払い下げられた(吉川1932)

政徳丸について少し触れておけば、「先年蝦夷地御用之節御買上」になった船で、幕府の御船手の預りであったが、1799年(寛政11)に蝦夷地御用掛(のち箱館奉行)の管轄に移された。御用掛がはじめて蝦夷地に差し向けた船がこの政徳丸であった。しかし、これ以前にも政徳丸は蝦夷地に航行したことがあり、ラックスマンがネムロに來航してきたおり、寛政五年春箱館からアッケシまで小人目付寺沢治部左衛門らが乗り兵糧米を運送している(ただし、ここには清徳丸とあり。『御私領ノ節魯西亜船入津一件』,山下編集2003:10-11)。とくに注目されるのは、盛岡藩大畑の村林源助『原始謾筆風土年表』上に「政徳丸御船去亥年(1791年・寛政3)始て赤塗たりしか、当年(1794年・寛政6)も当湊(大畑湊)へ入津せるに添触の翰あり」と記しているように、政徳丸は蝦夷地御用にあたる幕府船として赤塗りにした船であったことである(青森県文化財保護協会1960:178)。政徳丸に乗り組んだ人たちは、御召船手向井将監組に召し抱えられた大畑湊出身の水主同心組頭格長川仲右衛門ら、大畑出身者が少なくなかった(笹沢1978復刻:26-27)。

蝦夷地御用船を赤く塗るのは政徳丸に始まるといってよいだろうか。それが他の官船にも継承され、蝦夷地御用船を赤船と通称するようになったのだと思われる。『日本国語大辞典』第二版によると、蝦夷地御用船のほか、「装飾と防食のため、船体全体を赤色の漆で塗った」幕府・諸大名の御座船があったというが、この説明のかぎりでは幕府の御座船だけが赤く塗られていたという特権性のようなものは窺われない。その点はともかく、蝦夷地は近世中期までは日本地の外側に位置する異域であり、それを幕府直轄によって内国に編入したが、幕府直轄の蝦夷地の海域であることを国内の商船だけでなくロシア船・アメリカ船など外国船にも識別させるために、意識的に赤船を登場させたといえるだろうか。日本の船の色彩シンボリズムは「赤船」と指摘していた黒田日出男の言及が想起される(黒田1986:117-118)。

さて長春丸であるが、『休明光記』が記す30艘の船名のなかにはみえない。『原始謾筆風土年表』上は、この長春丸についても重要な情報を書き残してくれている。大畑は松前・蝦夷地と本州の諸港とを結ぶ情報の集積地であったことを物語るが、1803年(享和3)の条に、「去々年簾元衆の渡海にハ兵庫造関船瑞穂丸栄通丸五百石形の船々にて有しに、当年浦賀造の関船七百石形の長春丸と変て、瑞穂丸ハ南部家、栄通丸ハ津軽家と受り」(青森県文化財保護協会1960:259)と記されている。『休明光記』には確かに瑞穂丸(350石、大坂建造)・栄通丸(右に同じ)は関船とあり、蝦夷地勤番の役を勤める南部家・津軽家に引き渡されていたことがわかる。この瑞穂丸・栄通丸の後継船として長春

丸が就航し、1803年（享和3）、箱館奉行戸川筑前守（安論）が箱館に赴任するにあたって、佐井から箱館に渡海するのに長春丸が利用されている。

長春丸が関船であるというのは、1807年（文化4）に幕府船手組の露木元右衛門が「御関船長春丸御船の造方にて、以下五艘程御造立」あれば非常の節要害にもなると、上申の書付中にも出てくるので確実である（早川編輯 1913：342）。関船は近世の代表的な軍船で、将軍・大名等の御座船として利用されたが、関船形式というパターン化した船型がみられるという（石井 1995b：127-131）。そこに紹介される関船の図面をみると、船尾一杯まで矢倉部分が延びているのに対して、図1では船尾の幟などが立つあたりが矢倉になっていない、という違いがある。図1がどこまで正確かという問題があるので、あまり確定的に信用しないほうがよい。松前奉行の時代になるが、図1の説明文では「常はいぎつふの御船蔵に入よし」とあるので、ふだんは運送などには使われず船蔵に保管されていたことになる。船蔵のあった「いぎつふ」は松前市中の生符町（イケップ、イゲップ、エケフなど）のことだろう。伊達家（伊達林右衛門）文書の1814年（文化11）8月の一札に「イケフ町ニおゐて御船長春丸御船具置所六拾壱坪余之地所」（『諸証文控帳』、松前町史編集室編集 1979：573-574）とあることでも、生符町に長春丸の船蔵があったことが確認される。

長春丸が利用された事例を少しあげてみよう。幕府役人の松田伝十郎は1807年（文化4）3月蝦夷地在勤を命じられ、箱館に赴任する箱館奉行戸川筑前守の道中手付となった。4月に西蝦夷地一円が上地となったことを受けての5月10日の江戸出立であったが、旅の途中でロシア来寇事件の知らせが飛び込んできて、筑前守をはじめ「一同心配の旅」だった。盛岡藩の下北半島にある佐井浦に到着すると、箱館から出迎えの「御船」長春丸（船頭露木元右衛門）が来ていた。万が一のロシア船の攻撃に備えて盛岡藩の海岸通りの物々しい警固のなか、6月12日、日和がよく筑前守ならびに手付、そのほか一同が長春丸に乗り組み、佐井浦を出帆し、海上に別条なく同日箱館に着いている（『北夷談』、谷川編集代表 1969：106）。

また、若年寄堀田正敦（堅田藩主、仙台藩主宗村の子）は、1807年（文化4）のロシア来寇事件にさいして松前・蝦夷地（有珠まで至る）に巡察使として派遣され、『松前紀行』という和文体の紀行を著しているが、それによると6月21日に江戸を出立し、7月21日佐井湊に到った。佐井に6日ほど滞留し、26日になってようやく「けふは風よければ、船よそひすと告げ来れり。嬉しくて、とみにさうぞきつゝ、皆うちつれて」長春丸に乗船して、その日のうちに箱館に到着した（鈴木編輯 1924：54）。そのほか伊達林右衛門の『日記』によると、1821年（文政4）松前藩の復領が決まり、翌年6月9日、引継ぎなど終えた松前奉行夏目左近将監（信平）が長春丸で松前を出帆したこと、8月3日には吟味役森覚蔵ら幕府役人がやはり長春丸で出帆したことが知られる（松前町史編集室編集 1979：644-646）。

このような利用事例からすると、箱館奉行（松前奉行）、若年寄など幕府高官が海峡を渡るさいに専ら使われる御座船であったといつてよい。図1をみると、船尾の方に吹流しが大きく波風で靡いている様が描かれている。この吹流しは『陸奥日記』の文章中（前出）にもそのまま図示され、「白」と注記されている。また、幟が二本立っているが、これが「日の丸」の旗であろう。狩野文庫本『陸奥日記』乾の図は簡略化されているが、日の丸の旗とはっきり認識して写している。

福居芳磨『蝦夷の鳴踏』によると、芳磨は1801年（享和1）、松平信濃守忠明ら蝦夷地御用掛の一

行に加わって松前に渡海したが、そのとき乗った瑞穂丸は「御船の御しるしは白き布に日の丸の幟、吹ぬきなど、あまたたてな」らべたものであった（板坂編 2002：70）。長春丸に先行する関船瑞穂丸も日の丸の幟を掲げていたことがわかる。幕府の城米輸送船などが縦長の日の丸の旗を掲げていたのはよく知られている事実で、幕府のシンボルマークとしての意味を帯びていた（石井 1995 b：274-276）。蝦夷地で使用された日の丸の旗としては、日の丸の下に「蝦夷地御用」と墨書した旗が蝦夷三官寺のひとつ有珠の善光寺に現存されている（北海道開拓記念館 2002：38）。図1には吹流し・日の丸の幟（旗）のほか、纏、鏝三本が描かれている。

図1の長春丸の絵でもっとも目立っているのは帆に日の丸が大きく描かれていることであろう。石井謙治によると幕府の御船手支配の御座船（関船）はすべて丸に三つ葵の紋を帆印にしていたという（石井 1995 a：58）。幕府の御用船・御座船でもあまり例がないということか。帆に日の丸をかたどった幕府船としては、北海道大学附属図書館北方資料室所蔵の鈴木周助『蝦夷地開発記』（1799年・寛政11）に描かれた神風丸の例がある（図2）。1799年（寛政11）6月27日に江戸を出帆し、東蝦夷地アッケシに8月29日入津した。天度測量のため天文方が乗り組んでいた。同書の説明によると、神風丸は「朱塗唐船造」りで、1460石積の船であった。図2にも船体部分に朱と記し、赤船であったことがわかる。また、帆が4本あり、いずれも「日ノ丸」の帆印であった。こうした長春丸・神風丸の例から、他の蝦夷地御用船（赤船）も日の丸の帆であったとみてよいかは速断できない。



図2 御用船神風丸 『蝦夷地開発記』所収。北海道大学附属図書館北方資料室所蔵。

長春丸は松前藩復領後もそのまま松前に留め置かれ、松前藩に下げ渡されたようである。そのことは、松前城下の町年寄の執務日記の抜書（『町年寄日記抜書』）に、1829年（文政12）4月17日の条として次のような記事があることで知られる（松前町史編集室編集 1977：470）

御船長春丸帆印日ノ丸式ツ割二分テ見苦敷被思召、日ノ丸之処切抜、三本印ニ付替候様被仰出候付、紀三郎殿 御達有之候間、同船帰帆の上善太夫え申渡候事。

これによると、『模地数里』以外の史料でも、長春丸が日の丸を帆印にしていたことが確認されるが、松前藩主はその二つ割れが見苦しくなっているといって日の丸の処を切り抜き、松前藩の船印である三本印に付け替えるよう指示していた。すでに松前藩の所有に帰しているから可能なことであった。日の丸から三本印へと、箱館奉行・松前奉行時代の幕府御座船長春丸は姿を変えた。

なお、松前藩主の御座船は、よく知られているように長者丸という名の船であった。梁川転封以前、松前復領後も船体は変わっているが同じ船名が使われている。復領後は藤野家の持ち船で、関船形式ではなく弁財船を転用したものであるが、藩主の召船として使われるときには松前藩の家紋である武田菱のついた幟や幕を使用した。『福山温故図解』に描かれた長者丸の図によると、帆が降ろされ

た状態になっているものの、三本の縦線の帆印であることが知られる（松前町教育委員会編集 2001：27）。また三本印がはっきり描かれた長者丸の絵馬も残っている（松前町教育委員会所蔵，吉本善京筆，高田屋嘉兵衛展実行委員会編集 2000：61）。

Ⅲ 働く女たち—アツシ・れんじゃく—

『模地数里』で着目したいのは松前城下（福山）で働く女性に関心を向けていることである。図3がそれであるが、まず、図の説明文には次のように記されている。

○肴商人ハ何れアツシを着る。四五月頃ハます・ほつき・あぶらめ・あかぞい（アンホンカサコニ似たり）・そい・ながら・むらぞい。

○又手伝人足に女子此ことくのなりにて御城掃除など亀甲地形などにハ多く出る。町役所にも此ことき女人足溜り居て所々の運送にやとハる、也。 ※「地形」（じぎょう）は地面をならし固めること。

○女商人多し、売声せうぶかわねかんす、竹の子かハねかんすといふ、浜方の女もかこに入てあわびかわねかんすとよぶ。

また、図3と対応すると思われる『陸奥日記』の記述も紹介しておこう。央齋が4月30日、逗留先の坂本良亮に案内されて城下を歩いているときに見た光景である。

松前ハ女の多き処にてかるき者ハ多くゑそ地へ参りかせき、妻ハ商ひをし又日雇に出て暮すよし。女の商人多し。ミナアツシヲ着、頭をつゝみ、かごに売物を入、れんしやくにてせおひ、せうぶかハねんかす、竹の子かハねかんすといふ。竹ハ大きなるハなし、竹の子らう程にて三四五寸の斗也。浜辺の女ハ魚をも此かこに入て、あぶらめかハねかんす、あわびかハねかんすとよぶ也、男の肴うりは江戸の水くわしの箱に入て、ますやます、ほつき〜とうる也。又ひらめなるかこにならべ、ふたもかこにしたるに入両かけにし、そいやむらぞい引ナガラあかぞいと売也。

この他にも、『模地数里』は図4にも働く女を描いている。説明文には「町会所に集居るを呼て遣ふ。女の日用は材木其外何にてもミナれんじゃくにて背負也。酒も二斗入之樽多し、ミナ大坂も回るとてむしろハなく樽に書付有三貫文、青森弘前黒石の酒は二斗入壺貫八百文也」とあり、女が「れんじゃく」で背負っているのは酒樽なのであろう。また、『陸奥日記』には松前を船出する5月10日、「天気よし、今朝より船手御役人も御出、早朝も人足集り来りて追々船へはこふ、女人足も来て弁当の用意などするよし」と、女人足のことに触れている。



図3 女の商人・手伝人足



図4 女の日用・炭を運ぶ馬子

松前に上陸した旅人は、「売女」（遊女）が目立ったとみえてその風をよく記している。その点では中央齋も同様であるが、働く女のすがたにまで関心に向けて記述しているのは少ないように思われる。中央齋が観察した松前城下の印象は「松前ハ女の多き処」「女商人多し」とあるように、男に比べ女が多く、物売りや日雇いのすがたが町中で目についていたことである。ちなみに松前市中（福山）の男女人口は、『松前志』の人別帳写によると、1777年（安永6）、諸士扶持人男865人・女661人（170軒）、寺院男119人・女12人（17ヶ寺、僧・山伏・俗）、社家男24人・女15人（7軒、社人・俗）、町男2,362人・女1,946人（1,254軒）、合計男3,370・女2,634（1,448軒）人であった。ただし、『松前志』の記す合計は人口5,006人、軒数1,434軒とあり、実際の合計と合わない（大友喜作編 1972 復刻：163-164）。

『模地数里』の1818年（文政1）に近いデータでは、武士や寺社を除く松前市中人口になるが、1809（文化6）男3,656人・女3,428人（2,135軒）（『村鑑下組帳』、鈴江 1985）、1828年（文政11）男3,925人・女3,662人（2,198軒）（『町年寄日記抜書』、松前町史編集室編集 1977：479）となっている。町方の人口だけでみると、1777年（安永6）4,308人から1809年（文化6）7,084人・1828年（文政11）7,587人へと人口が1.6～1.7倍に増加するとともに、男女比では女の割合が1777年45%、1809年48%・1828年48%と増えて男女数の開きが縮まってきているのがわかる。それでも人口は男のほうが上回っているから、人別上女が多いわけではない。

しかし、中央齋が訪れた時期、「かるき者ハ多くゑそ地へ参りかせき」とあるように、男たちは蝦夷地に稼ぎに出ていて不在だった。そのことが女の多い町だと感じさせた理由である。前出『村鑑下組帳』によると、松前市中の「土地出生之百姓は蝦夷地支配人、通詞、番人、稼方ニ罷越候者」や、鯨取、蝦夷地出稼、船手道先、増水主稼、船乗といった「稼業」についており、春の鯨漁のころともなると一斉に城下から出立していったものであろう。その一方で、「不勝手」の男たちもおり、彼らは馬追駄送、賃銭稼、日雇取、船手水揚、丁持、あるいは山中での炭焼出稼、畑作先截（前裁）物に従事していたという。女については、「一統ニ手業無之、夫を不持、壺人店借住居ニ而、船手之者并店向之洗張等ニ而相暮候者も有之」と記すばかりであるが、中央齋の上述の「妻ハ商ひをし又日雇に出て暮す」というのは、蝦夷地稼ぎや船乗りを夫にもつ女たちの暮らしをさしており、松前に残る「不勝手」な男たちと変わらない働きぶりであった。

その場合でも男女の仕事の多少の住み分けがあり、女の領分としてはとくに魚や野菜を売り歩く小商人が活躍の場であったといえようか。また御城掃除や、建築場の地形（地固め）、運搬、弁当づくりなどさまざまな日用に従事していたことが中央齋の記述から窺われる。町役所（町会所、町年寄の詰所、藩政期には町奉行所も同じ区画内にあった）が仕事を求める女人足たちの溜まり場になっていたという指摘も見逃せない。町役所は伝馬人足や土木工事などの人足の徴集事務を管掌しており、そこに行けば何がしかの仕事があり賃銭稼ぎができたのであろう。

女商人たちが売っていたものは、4月末、5月始めという季節から、菖蒲や竹の子、あるいはあぶらめ、あわびなどの魚介類であった。『陸奥日記』の5月5日条に、その日の節句について「何方ニ而も客人へまき（ちまき也）を出すに、芋のやうなるホドといふ実をゆで、二つつゝに菖蒲を添て出す。ホドハゆりの少し甘ミ有ものにて…」と記し、また同じ松前奉行時代の『松前歳時記草稿』には「家々軒へ菖蒲をふき」、「今日ホト、シヨデの羹を食ふ」（原田編集代表 1976：694）とあり、菖蒲は松前でも五月の節句に使われ、それを武家や商家に売り歩いていたのだろう。

央齋は女商人たちの物売りの声まで書きとめている。「せうぶかハねかんす」「竹の子かハねかんす」「あぶらめかハねかんす」「あわびかハねかんす」といった売り声が城下の隅々まで行き渡っていたに違いない。男の「ますやます」「ほっき〜」と売り物の名を繰り返すだけのと違って風情がある。こうした女たちの売り声については、松浦武四郎も記している。この場合には松前城下の西在二里ばかりの札前村から城下に売るにくる事例であるが、「其売り声も異様ニし而アワビカワンカイナー、何カワシヤンセンカーと云也」（吉田校註 1970：484）とあって、売り声の語尾の箇所が異なっている。城下と在では幾分言葉が違っていたのだろうか。高倉新一郎によると語尾に「ウンス」をつけるのは丁寧な言い方だという（高倉 1987：38）

図3・図4に描かれた働く女のすがたに目をむけてみよう。女の商人は「ミナアツシヲ着、頭をつゝみ、かごに売物を入、れんしやくにてせおひ」、「女の日用は材木其外何にてもミナれんじやくにて背負」というのが働く女たちの「なり（形）」の説明であるが、図1の男と比べたときの共通点と差異をみると、男女ともに「アツシ」を着て、帯を前結びにしており、脚半や草履を履いていることである。頭は風呂敷様のもので被り物をし、顎のところで両端を結んでいるのは同じだが、女の場合には口元を覆い隠しているのが特徴である。男女の大きな違いは運搬法である。男は天秤棒を使い、女は背負い縄を使った連尺を使うのが一般的だったようで、運搬法の性差を認めてよいだろうか。東北地方の方言ではれんじやく、りんじやくというから（『日本国語大辞典』第二版）、松前でも背負い縄をそのように呼んでいた可能性がある。なお、北海道ではアイヌ民族が前頭部運搬であることが知られているが、松前地の和人男女がそうした運搬をしているという文献・絵画史料は見当たらない（菊池：2004a）。

さて、央齋が男女ともに「肴商人ハ何れアツシを着る」という「アツシ」であるが、それはアイヌ語のアットゥシが日本語化し呼称として一般化していたものである。松前地や北東北の住民が男女とも「アツシ」（アイヌ製作のアットゥシ、および和人の手によるアットゥシ風の衣服）を着ていたことを示す文献、絵画は少なくない。『模地数里』以前の記録でいえば、たとえば、1783年（天明3）に江差まで行った平秩東作『歌戯帳』が津軽領や松前城下で「アツシ」を着る和人について書きとめている。

松前に滞留したさいには、浜に到着した秋味船から鮭を荷揚げする光景をみているが、「ミナあつしとて木の皮にておりて、もめんにてさま〜の模様をさしたるものをきる。女もきるなり。汐にぬれても身にまとわず、しほれず、よきもの也といふ。にしん猟のとき、此服にてなければはたらきあしく、ミナゑぞ人のおりぬひなり。婦人などのハあかき所もあり、こと様の物也」（9月21日）、「舟どもより鮭をせおひてはこぶ人、あつしといふ物を着て行かふさま、めなれず、からへわたりたるごとし」（9月23日）と、アツシに異文化表象を感じながらも、労働着として優れている面に着目している（森他編 1981：276-278）。

この鮭の船から運ぶ作業には女も混じっていたのであろう。その女たちも皆「アツシ」を着用し、赤い模様などついているのを観察している。平秩はさらに、城下の「此辺の町にて売るもの。あつし。蝦夷の服。木の皮にて織文をさす。狐皮…」（9月23日）と、松前城下で「アツシ」が店で売られているのを観察していた。アットゥシはアイヌ社会では自前の衣服であるが、和人の労働着（または生活着）としての需要が高かったので、和人向けの生産が活発に行われていたことが明らかにされている

(本田 2002)

『模地数里』にも松前城下で「アツシ」が売られていたことを示す図が描かれている。図5の仁岸屋と暖簾にある「小売商人見世」の中をよく見ると、「アツシ」と思われるアイヌ模様のついた薄い茶色の衣服が吊り下げられている。他に白い無地の衣服と、蓑もしくは毛皮のようなものが掛っている。『陸奥日記』には「アツシハ松前にてハ多く着る事にて、船方の者ハ不残着る故売処所々に有。縫もやうの有ハ一貫五百、二貫、三貫、ぬひなき八百ほど也。又白くのがらむしにて織たるハ、ユタルベといひてカラホトも出、今ハ金貳分位なり」(5月2日)とあり、「アツシ」を売る店が方々にあり、その値段まで記しているのは貴重である。「ユタルベ」とあるのは、おもに樺太アイヌがイラクサという草を使って織ったレタラペのことであろう。



図5 小売商人の見世

この『模地数里』『陸奥日記』のほかにも、庶民女性の働く姿を描いたり、書きとめたりしている例は多いわけではないがある。早い例としては18世紀半ばころの江差浜の鯨漁の光景を精細に描いた小玉貞良の屏風図(『江差前浜屏風(江差浜鯨漁図屏風)』市立函館図書館所蔵模写)であろうか。このなかには「アツシ」を着、頬被りし働く女たちもたくさん描かれている。その点では央斎の物売り・日用のすがたと異ならないが、いくぶん違うのは前掛け(前垂れ)をし、笠を被っていることである。前掛けをした女が天秤棒で桶に入れた水を運んでいる場面もみられる。こちらは獲ったばかりの生鯨を運ぶ作業なので前掛けが必要とされているのだろう。秦檜磨『蝦夷島奇観』に描かれた、アイヌ模様の「アツシ」を着た箱館市中の「婦女」や、鋤で耕す「農女」の図などはよく知られている(佐々木・谷澤 1982)。

また、央斎の観察より後の記録になるが、松浦武四郎『三航蝦夷日誌』(1850年・嘉永3)や平尾魯僊『箱館紀行』(または『松前記行』, 1855年・安政2)の記述が時代変化を知るうえで参考になる。まず、武四郎であるが、前述した札前村から松前に出てくる女商人について次のように記し、そのすがたをスケッチして残している(図6)

札前村…日々松前の城下ニ商出す。其風俗甚おかし。其さま下に
 図するとき短きアツシを着て風呂敷を冠り、馬には籠を二ツ附
 而是ニ小鮑又は海鼠の類を入、又小魚等をも持来るなり。扱其風
 呂敷をかぶることは此地の風品にし而、夏冬ともニ多く紺の風呂
 敷を冠る也。また履ものわらんじ又は下駄等を履て来ることも有る也。其は如何に下駄をはくと
 いハ、往来ともニ市中ニ入来るまでは皆此籠の上に乗りに来る故也。又海岸砂道なる処は至而
 下駄が歩行よろしきもの也。(吉田校註 1970: 484)



図6 魚売りの女商人 『三航蝦夷日誌』上484頁, 吉川弘文館。

この場合は、在から城下に売りにくる女商人である。馬に魚を入れた籠を積み、自らも馬に乗ってくるものという。履物も海岸の砂浜を歩くので下駄が便利というのうなづける。頭には紺色の風呂敷をかぶるのが習慣になっていたようだが、『模地数里』の図と比べ、顎のところできっちり結んでいるというより、ややゆるやかな留め方になっているように思われる。一方、平尾魯僊は『箱館紀行

附録』に次のように述べている。

この地の風俗、男はさして替ること多からすと雖、農人は大に異にして、毎旦菜瓜薪炭などを售^{ウリ}に出る。男女はみな紺の腿曳脚佩^{モ、キヤハン}に同じ色の足袋を穿き、紙緒の草履^{サウリ}にて、着たるもの結城の柳条綿布^{マモメン}に、肩と裾に蝦夷縫^{シタテ}を飾り、世に云ふアツシといふ制にして、丈四尺二三寸、筒袖の物なり。帯は、男は大かた絹帯、女は絹も有れ共綿布多し。笠は竹皮笠^{タケノコカサ}、又藺笠^{アミカサ}なり…（森山校訂 1974：181）

『松前記行』にもほぼ同様な記述がみられ、「農人」以下のところは、「又農民等、日々市中へ野菜・薪炭などを売るに出る男女は…」とあり、松前もしくは箱館に売りに出る小商人をさしている（谷川編集代表 1972：317）。ここで注目しておきたいのは、幕末ともなると働く庶民の労働・生活着に変化が生じ、アイヌの人たちが織ったアットゥシそのものではなく、おそらく古着であろうが、木綿衣にアイヌ模様をつけアットゥシ風の拵えにした衣服を着るようになってきていることである。しかし、素材がアイヌの樹皮衣から和人の木綿衣に変わっても、アイヌ模様をつけ続けるというのは、それだけ長く「アツシ」に慣れ親しんだ歴史を物語っている。

ここでは働く女性に焦点を合わせてみたが、『模地数里』には「アツシ」を着る男性ももちろん描かれている。図7は夜番人の図である。右手に挑灯、左手に棒を担ぎ、風呂敷様の布で頬被りし「アツシ」を着た夜番人は、口を覆っていないので男かと思われるが、特徴的なのは腰に下げている鳴子である。鳴子は作物を荒らす鳥獣を追い払うための装置（農具と言ってもよいか）であるが、ここでは夜回りが腰に下げ、歩くたびに音が発することに効果を認



図7 夜番人



図8 船頭(かざまち)の客

めての利用であろう。図8は、松前に入港した諸国の廻船の「船頭の客」が、川原町・蔵町・中川原町に集中する茶屋で三味線・太鼓を聞きながら酒食しているところで、その中に「アツシ」を着た男が一人描かれている。「アツシ」は女以上に男の労働着・生活着として定着していた様子が『模地数里』からも窺うことができる。

IV 松前の馬—野飼い・馬追（馬子）・菖蒲乗—

『模地数里』図4の右半には、馬引きの男が描かれている。説明文には「薪は多くぶなといふ三尺斗にて大きなるを割りてたく、又在方山方も来るハ馬八疋に附たる壺^{ユリ}とて売、およべ炭とて町々売、馬ハ竹の轡にて荷くらハかまにて作りたるもの也、一人して八疋十疋と曳て売ありく也」とある。図の俵のなかには黒い物が見えているので、及部村から来た炭売りの男なのだろう。また、『模地数里』および『陸奥日記』には、次のような記述もみられる。

- 七面山へ参りしに…山の上の広野に馬多し、皆松前の町へ出る馬にて、ここにはなちおくと也、すへて山には立木一本もなくミな芝山なり。（『模地数里』）
- 馬子壱人して馬十疋十五疋を曳事、松前の外有へからず。馬持ハ百も二百も持、馬子五七人にかはり〜曳する事にて、一度荷を付て用をなし帰れハ、其ま、山にはなち置故、勝手に草うち食て居る也。入用の時ハ何疋も曳来り荷を付て出るといふ。冬ハいかにと尋けれハ、雪を掘ても草を食、又磯へ出波にうち上たるごも〜をも食て飼料更にいらすと也。其うへ子も出来、中には乗馬にもなる馬ハ金になるといふ。専念寺といふもんと寺ハ三百疋も持しなときけり。（『模地数里』）
- ばくち石 此処⁽⁹⁾と名とす。海辺に広く垣をし、中に馬を多く入置百余疋と見ゆ。是は蝦夷地ウス・アブタの野より取来り、爰にて津軽南部へ売。買人ハ垣にのぼり見立て引出させ、よく目き、して直段をきハむ（『模地数里』） ※同様の記述『陸奥日記』にもあり。（5月2日）
- 薪ハぶなの三尺斗なるを割てたく。又山かた^(カ)に雑木を馬につけて木^{キイ}〜と売也。此馬八疋を壱人してひく。荷物八駄^(カ)を壱疋と松前てはいふ。馬ハ百も二百も持たる者有。馬子ハ五六人にて何疋も請まへ、目印有て引ゆき、其日の用済候へハ、又山にはなち置也。其家にて飼付候事ハなく、年中山野の草を食次第に致置よし、冬雪降候ても鼻にてほり明根を掘食、雪中ハ磯に出て波に打上候ごも〜なともたべ候よし、専念寺などにハ三百余の馬をもちて中にもよきハ乗馬に売、雑役馬にも売候よし、町々を十疋十二三疋も一人して曳、およべ炭など売ありく也。（『陸奥日記』5月9日）

これらの記述からわかることは、①松前城下に近在の村から薪（雑木）や炭を運搬してきて販売する人たちがおり、それが都市住民の燃料の供給源になっていたこと、とくに及部村は炭の産地として知られていたこと、②薪や炭の運搬のために馬が利用され、馬子一人で八頭から拾数頭の馬に積んでやってくること、③馬は雪の降る季節も含めて放し飼いにしているので飼料がいらず、必要なときに馬を捕まえ、用事が終わるとまた野山に放してしまうこと、④馬を100頭から200頭も所有する者がおり、乗馬用や雑役馬に販売していること、馬には所有者の目印がつけられており判別できること、専念寺などは300頭も所有していること、⑤1805年（文化2）に開設されたウス・アブタの牧で生まれた馬を松前城下に移し南部・津軽方面に売却していること、といった点である。前節では、城下近在から魚籠を馬に積んで売りにくる女商人の例があったが、薪・炭に限らず、城下に野菜や魚介類を付け出す場合などにも、馬が運搬手段として日常的によく使われていたことを示している。ここではとくに馬の野飼いと馬子に関心を向けてみようと思う。

まず、馬の放し飼いについては、1717年（享保2）の幕府巡見使の覚書である『松前蝦夷記』がやや詳しく触れている（松前町史編集室編集 1974：388）。それによれば、松前の西東在郷には馬が多く、野牧がある。野山に放し飼いしてあるので野牧のようだが、「大方主付有之馬」であって所有者がいる。5月節句頃から8、9月まで家々に牽き入れ使う。飼料は草ばかりなので、馬は能くても力がない。馬屋は外垣を結い廻しただけで屋根がない。8、9月と過ぎ用が済むとまた野に放す。馬を何里も牽き廻すことがあっても「沓打」することはない。乗馬用にはならず、乗馬は仙台南部より調べている。およそそのようなことが記されている。央齋の見聞では乗馬用にも売るとあるから、そのように変化したのだろう。ついでに言うておけば、同書は松前・蝦夷地にないものとして牛をあげ、

また蝦夷地には馬・牛ともないとしている。前期幕領期にウス・アブタに馬牧が開設されるまでは蝦夷地に牛馬はほとんど持ち込まれず、アイヌ社会は馬とは無縁であった。「牛はむかしなし。近頃出来たりといふ」（平秩東作『東遊記』1784年・天明4序、谷川編集代表 1969：432）と記す記録もあるが、松前地には央斎の時代を含め、牛はほとんど飼われていなかったとみてよいだろう。

最上徳内は「松前に牛馬ある事」として、馬の野飼いについて述べている（牛は箱館最寄の銭亀沢に少しあるとする）。極寒になり雪が大層積もるようになると、馬は浜辺に出て打寄せられた海藻を拾い食べる。それは央斎の記述と同じであるが、放っておくのではなく、土地の者たちは雪の上にやらいを結んで、そのなかに馬を取り集めて入れ置き、干草（蓬まじりの茅）を与えるのだという。馬の剛強なことは日本の馬に比類なく、轡も用いず、沓もかけず、山坂の岩石、磯辺・川原を歩かせてもひるむことはない、『松前蝦夷記』とは別な評価を下している（『蝦夷国風俗人情之沙汰』1790年・寛政2序、谷川編集代表 1969：448-449）。平秩も「馬当地に産するもの駿足多し。南部、仙台の産にもまされり。巖石の上を行くにも沓をうつ事なし。性おだやかにして五疋、三疋一人にて取廻すに…、旅しても家にも荷をおろせば野放にして心まゝに草をかふ」と、徳内と同様の評価を前出『東遊記』で述べている。

徳内は乗馬を頼んださい、次のような体験をしている。喜古内（木古内）に泊ったときのことだが、朝頼んでおいた馬が来ない。馬子になぜか聞くと、野放しに飼い置いた馬をきのう捕まえておいたが手綱を切って逃げたのだという。ようやく馬が見つかり乗ることができたが、途中馬士1人で馬5疋を繋ぎつれて往来しているのや、浜辺に6、7疋が遊んでいるのが見えた。馬子は20日以前野放しした馬が行方知れずになっており、浜辺の馬が自分の馬かと確認したが違い、熊に取られたのであろうかと語っていた。央斎の記述を裏付けるように、ふだんは野飼いしており、必要なときだけ捕まえてきて使うというのが習慣であったことがここからも窺われる。馬が熊に襲われるというのは珍しくなかったようで、武藤勘蔵『蝦夷日記』（1798年・寛政10）には、乙部村辺で野飼の馬が喰い殺され騒ぎになっていたことが記されている（谷川編集代表 1969：15）。

馬子が一人で馬を3～5疋から10数疋を引いているのも松前の特徴として観察されていた。右に述べてきたほかに、松浦武四郎は「馬士壺人にして凡七、八つヅツも引連行けり。…馬士は其父馬に乗りて先ニ走り行こと也。左有る時は残りなく馬は皆其後より是ニつきて走ること也。実ニ其ならし方珍敷こと也」と述べている（吉田校註 1970：83）。牡馬1疋を飼いならしておけば、それに数頭の牝馬がつきしたがってくるという馬の習性を利用したものであった。

松前地でどれくらい馬が飼われていたのか、央斎に近い時期の『向山誠斎雑記』（丙辰剩綴）のデータを図9に示してみた（大口監修 2002：277-300）。松前城下の西在にあたる根付田から蝦夷地境の熊石村までの村々の馬数が書上げられている。1807年（文化4）の松前藩転封にともなって幕府への引き継ぎのために作成されたもので、1806年（文化3）頃のデータであろう。1軒あたりの馬数を知りたいので、軒数と馬数を示した。もうひとつ、前出の1809年（文化6）『村鑑下組帳』にも、松前城下付の西在・東在の馬数が記されているので、括弧内に軒数・馬数をあげておいた。記載なしは馬がないので省略したと思われるが、江差と松前については相当数の馬が存在していたとみなければならぬ。

この図9からわかるのは、軒数よりも馬数が多い村がある一方で、馬が1疋もない村が存在して

いたことである。その対極的な村のすがたは、住民の稼業の違いに起因していた。『村鑑下組帳』はそのあたりの事情をよく示してくれるが、牛馬のまったくいなかった大沢村を例にとると、男の場合、春は鯨取り、夏は昆布取りに出漁しており、漁業生産が主要ななりわいであった。松前地の村々はおよそそのような基本的な性格を持っていたといつてよい(菊池 2004 b)。自分で船持ちの場合もあれば、雇われて働く者たちもいた。それに対して、1軒あたりの馬所持数が多い松前近在の村の場合には、松前城下の都市住民の生活と深く結びついた稼業であったことに大きな特徴が認められる。

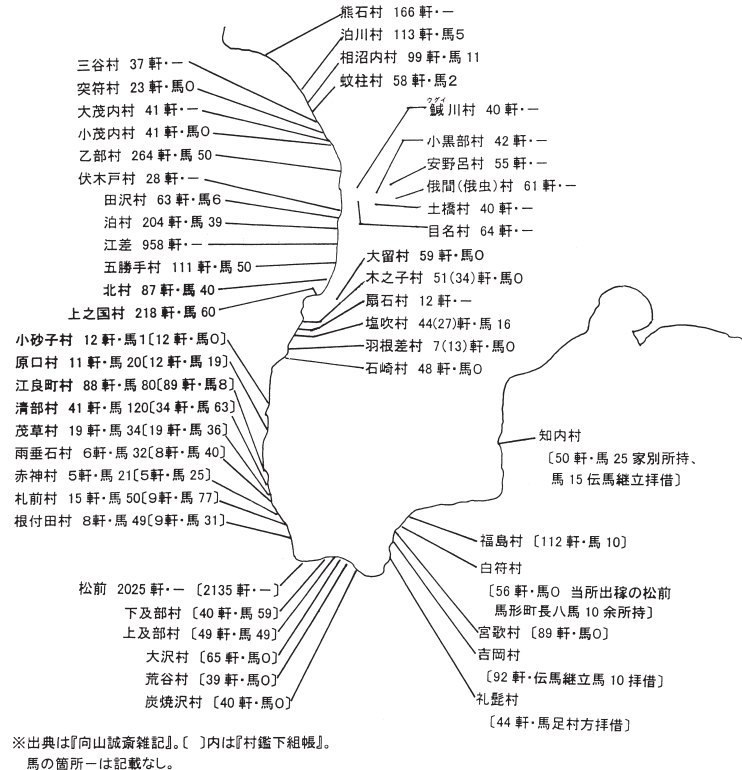


図9 松前地(箱館地方除く)各村の軒数・馬数

下及部村「男ハ春薪駄送り、馬追も有之、其外箱館往返荷駄売送り…、秋は馬附、薪伐出」

上及部村「男は春薪伐出、馬附ニ取出分は無運上ニ而、小割致し松前江売出…、冬は川流薪伐出ニ入山致し候者も有之、薪、馬追稼も有之」

根部田村「男は春鯨取…其外は馬追、炭、薪駄送り第一之稼、薪伐出ニは他村ニ雇入候も有之…、山ニ村方駄送一日路、夫ニ松前へ一日附出、其外春夏駄送稼」

札前村「春鯨取…、十月頃帰村、薪取…、冬中薪伐出産」

赤神村「男は春秋薪付出、馬追稼、冬中馬足相込候節薪伐出」

雨垂石村「春秋は薪付出、馬追稼之者五軒、炭焼稼当時四ヶ所、冬は薪伐出」

茂草村「男は春鯨取…、右稼出来兼候ものは白炭焼、当年竈拾式ヶ所、秋焚用之薪取、夫ニ秣干草刈」

清部村「男は春鯨取雇、馬持は炭、薪駄送…、(秋)焚用薪取、(冬)炭、薪稼村方持山ニ而竈ヶ所、他村出稼之者四人」

すなわち、これらの松前城下近在の村々は薪の伐り出し、炭焼きを生業としており、城下に販売する薪や炭を運搬するために馬が多く飼われていたといえるだろう。そうした駄送ばかりでなく、人や荷を積んで賃金を稼ぐ馬追(馬子)を専業とするような人々もいたことを示している。まさに央齋が述べている通りであった。松前城下については『村鑑下組帳』は何も記していないのでわからないが、馬を多数所持する者や、運送に従事する馬子(馬追)たちもいたに違いない。

馬が野飼いされているための支障も生じていた。野放馬に踏荒されて菜大根のほかには作物が作れない(大沢村)、菜大根を仕付けているが野放し馬に喰い尽くされ「馬除垣根防方」も容易でない(荒谷村)、かつては稗を仕付けていたが野放馬が踏み荒らすので一向に仕付なし(赤神村)、とある

ように、畑作物が荒らされるという被害が目立っていた。大沢村・荒谷村は自村では馬を飼っていなかったから、近隣の及部村などの馬が入り込んでいたものだろう。馬を野飼いする村では畑作が犠牲になっても、馬優先の村の成り立ちになっていたのである。馬の需要は右に述べたばかりでなく、松前藩の伝馬制度や、藩主・家臣団の乗馬用としても当然必要としたが、ここでは扱わないでおく。

『模地数里』にはもうひとつ馬が描かれている場面がある。図10の5月5日の節句に行われる馬乗りの行事がそれである。説明文には「津軽陣屋の門前通にて在々より自分の馬を引来て乗也、町人も爰にきてかけをのり、巧者なるハ曲馬をも乗、馬も夥しく見物くんじゆせり」と書かれている。央齋はわずか2週間程度の松前滞在であったが、そのなかで見物することができた年中行事であった。これによると、馬乗りしているのは武士ではなく、在の百姓や町の住民たちであったことになる。前述してきたような馬子たちが主人公であったのだろう。弘前藩の陣屋があったのは『模地数里』の松前図によると、馬形町方面の高台にあった。



図10 5月5日の馬乗りの行事

ほぼ央齋と同時期に成立した『松前歳時記草稿』には、「今日市中并在邑とも菖蒲乗と唱し、駄馬を飭り立、壯者群集し、乗走るなり（割注、加茂競馬などの古事残りたるにや）。市街幅広き所尤多し、見物の男女も又つとい集る也」と記されており、松前では「菖蒲乗」と呼んでいたのであろうか（原田編集代表 1976：694）。松前ではこの日風揚げも行われている。男の節句にふさわしい庶民行事であった。

この菖蒲乗は松前城下だけではなかった。松浦武四郎は「又今日（五月五日）江差、松前、箱館共に馬乗有る也。又箱館えは東部の蝦夷人も馬に乗来る也。其以上手なるが有る也。立乗、後ろ乗、其外さま〜に致す」（『秘女於久辺志』、吉田校註 1971：495）と記し、松前・江差・箱館の三湊にみられ、しかも箱館の場合、東部とあるから幕府が牧を設置したアブタ・ウス方面かと思われるが、アイヌの人たちも馬乗りしていたという興味深い記事となっている。また、安政元年以降の幕末期にまとめられた『箱館風俗書』には、「近在馬士の者共、銘々能き乗馬を当初え曳参り、舛形外より内澗町通り辺早馬乗競、互に楽しみ候仕来りに御座候処、町々駄馬等いたし候ては往來の者并子供怪我等も有之候に付、町乗差留め、当時亀田村において右近在の者ども寄り集り、馬乗致候仕来りに御座候」とあり、町乗りが禁止され亀田村に移っていたことがわかる（函館市 1974：702）。

おわりに

以上、『模地数里』にたまたま描かれたいくつかの図を取り上げ、その説明文や『陸奥日記』の該当の記述を利用し、また他の関連文献を探し出し、一八世紀前期（前期幕領期）における松前の様相の一端を明らかにしてみた。『模地数里』が描いた遊女、相撲、あるいはアイヌの御目見なども俎上にあげてみたかったが、それらについては別の機会に譲りたい。

拙稿の試みはこのCOE研究プロジェクトの画像資料を利用した生活絵引きの作成のための作業ブ

ロセスの提示でもある。近世という時代を対象にする場合、忘れられた過去となっていたり、そのころの習俗を今に伝えているといっても相当に変容を遂げている。一つの図・絵に描かれているさまざまな事・物を読み解き、それらにふさわしい名づけをし、内容を正しく説明していくためには慎重な裏づけ、証拠固めの作業を必須とするゆえんである。『模地数里』は実際に目にしたもののスケッチという側面が強いからそれほど意識しなくてよいが、作品としての絵画はシンボリズムや物語性、図柄のパターン化・借用（模倣）、虚構と実在の懸隔、など相当に厄介な問題を抱えていることも承知しておかねばならない。そうしたもろもろのことを考えると逡巡してしまうが、絵引き作成の可能性を開いていくためには、まずは描かれた事・物への即物的なこだわりから出発するしかない、ということであろうか。

引用文献

青森県文化財保護協会編

1960 『原始謔筆風土年表』上（みちのく双書9） 青森：青森県文化財保護協会。

秋月俊幸翻刻・解説

1994 『北方史史料集成』5 札幌：北海道出版企画センター。

函館市編

1974 『函館市史』史料編1 函館：函館市。

原田伴彦編集代表

1976 『日本都市生活史料集成』5 東京：学習研究社。

早川純三郎（国書刊行会代表者）編輯

1913 『通航一覽』第七 東京：国書刊行会。

北海道庁編纂

1936 『新撰北海道史』第五卷（史料一） 札幌：北海道庁。

北海道開拓記念館

2002 『蝦夷地のころ』（常設展示解説書3） 札幌：北海道開拓記念館。

本田優子

2002 「近世北海道におけるアットウシの産物化と流通」『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』
8：1-40。

石井謙治

1995 a 『和船』I 東京：法政大学出版局。

1995 b 『和船』II 東京：法政大学出版局。

板坂耀子編

2002 『近世紀行文集成』1（蝦夷篇） 福岡：葦書房。

菊池勇夫

2004 a 「荷を負うアイヌの姿—菅江真澄の絵から—」本COE年報1：13-19。

2004 b 「鱒漁に生きる人々—渡島半島西海岸の旅—」『真澄学』1：300-319 山形：東北芸術工科大学：
東北文化研究センター。

黒田日出男

1986 『境界の中世 象徴の中世』 東京：東京大学出版会。

松前町教育委員会編集

2001 『松前の文化財』（6版） 松前：松前町教育委員会。

松前町史編集室編集

1974 『松前町史』史料編1 函館：第一印刷出版部.

1977 『松前町史』史料編2 松前：松前町.

1979 『松前町史』史料編3 松前：松前町.

森銑三他編

1981 『随筆百花苑』14 東京：中央公論社.

森山泰太郎校訂

1974 『洋夷茗話・箱館紀行』 東京：八坂書房.

大口勇次郎監修・針谷武志編集・解説

2002 『向山誠斎雑記』嘉永・安政篇17 東京：ゆまに書房.

大友喜作編

1972復刻 『北門叢書』2 東京：国書刊行会.

佐々木利和・谷澤尚一 研究解説

1982 『蝦夷島奇観』 東京：雄峰社.

笹澤魯羊

1978復刻 『字曾利百話』 東京：名著出版.

鈴江英一

1985 「史料紹介『村鑑下組帳』」『松前藩と松前』25：69-113 松前：松前町史編集室.

鈴木省三編輯

1924 『仙台叢書』6 仙台：仙台叢書刊行会.

高田屋嘉兵衛展実行委員会編集

2000 『豪商高田屋嘉兵衛』 高田屋嘉兵衛展実行委員会2000編集.

高倉新一郎

1987 『挿絵に拾う北海道史』 札幌：北海道出版企画センター.

谷川健一編集委員代表

1969 『日本庶民生活史料集成』4 東京：三一書房.

1972 『日本庶民生活史料集成』20 東京：三一書房.

山下恒夫編集

2003 『大黒屋光太夫史料集』2 東京：日本評論社.

吉田武三校註

1970 『三航蝦夷日誌』上 東京：吉川弘文館.

1971 『三航蝦夷日誌』下 東京：吉川弘文館.

吉川秀造

1932 「徳川時代に於ける蝦夷貿易の官営」『経済史研究』37：40-54.